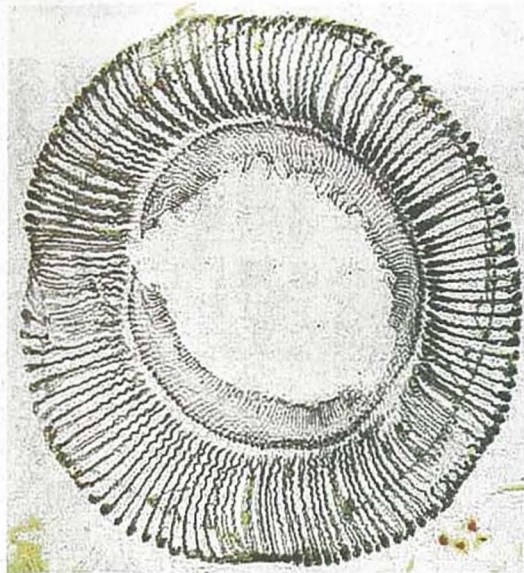


オワンクラゲ

久保田 信

50



△
白浜町瀬戸漁港
に漂っていたオ
ワンクラゲ

2004年1月下旬から毎日のように京都大学瀬戸臨海実験所の北浜にオワンクラゲが漂着した。ヒドロクラゲ類の中で最大級で直径10センチはある。2月8日には過去最多の約400個体を記録した。ほとんどの個体は傘縁が傷んで

触手がすっかり取れている。有性生殖を終えて、老衰で打ち上がったものだろう。このクラゲを特徴づけるのは何十本もの放射管だ。まるで自転車のスポークのように多数の筋になって、中央の口から傘の縁まで走っている。体が大いので栄養輸送用の放射管を多数にしないと、栄養を隅々にまで補給できないのだ。

オワンクラゲは発光するクラゲとしてよく知られているが、打ち上げ個体は弱っているほとんど発光しない。かろうじて触手が多く残っている個体を選び、棒でつついて刺激してみると、触手の付け根部分が瞬間的だが青白く発光した。

アメリカ太平洋岸に別種のオワン

クラゲが分布している。下村脩博士がこのクラゲから緑色蛍光タンパク質(GFP)を発見してノーベル賞受賞につながったので、よく知られている。医学への応用が目覚ましいが、光る動物づくりににも一役買っている。分子発生生物学のマーカーとなるGFP遺伝子をターゲット遺伝子につなげ、後者の発現を緑色に発光させて確認する仕組みである。マウスやショウジョウバエ、イネなどのさまざまな生物にこのGFPを組み込まれた。03年には「光るメダカ」が販売された。ただ、自然に放たれた場合、何が起るか分からない「光るモンスター」でもある。

オワンクラゲのポリプは群体性。保身のために身をすっぽり覆うキチン質の囲皮が発達せずヒドロ花がむき出しになっているのが特徴だ。ポリプの触手の間には「水かきのような薄い膜」がある。機能は不明だが、祖先のなごりとどめた形質とされている。

(京都大学准教授)